

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：23501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07112

研究課題名(和文)戦後日本における詩的言語の公共性に関する総合的研究

研究課題名(英文)Public spirit in Japanese postwar poetry

研究代表者

田口 麻奈 (TAGUCHI, MANA)

都留文科大学・文学部・講師

研究者番号：80748707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、1950年代に発行された希少な同人誌約750冊を整理して公的機関(日本近代文学館)に寄贈し、公共化した。鮎川信夫が、広島の人たちと創刊した詩誌『困窮地』について、創刊の経緯や詩史的な意義を明らかにした。「反戦平和のための詩歌原稿展」や「原爆展」(1950年代に姫路の詩人たちが主宰した重要な文化運動)の展示資料について整理・検証を行った。「荒地」や鮎川信夫の詩を世界文学として読み直すため、海外の戦後詩研究者と国際研究集会を実施した。以上により、『荒地』を中心として、日本戦後詩がいかに現代にも通ずる公共的な議論に参加していたかを具体的な資料に基づいて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, 750 Dojinshi, that is, coterie magazines, which were published in the 1950s and hardly read, were examined. They were accepted by the public institution, The Museum of Modern Japanese Literature and have been communalized. Findings revealed the poetry magazine Inyouchi, which was launched by Ayukawa Nobuo with poets from Hiroshima, played an important role in the postwar era. I inspected valuable manuscripts on the events of the postwar poetry movement, namely, Manuscript exhibition of the poetry for antiwar and peace and Atomic bomb exhibition, which were held in Himeji; I prepared them for publication. Furthermore, I conducted an international workshop of Japanese postwar poetry with overseas researchers to re-evaluate Ayukawa and Arechi as world literature. The findings reveal how Japanese postwar poetry where Arechi played a leading role had participated in the public problems through their poetry.

研究分野：人文学

キーワード：日本戦後詩 「荒地」グループ 鮎川信夫 公共性・公共哲学 詩の展覧会 1950年代の文化運動 原稿・草稿研究 戦後詩の翻訳

1. 研究開始当初の背景

日本国家の再建に向けて様々な思想が渦巻いていた戦後という時代には、詩人たちもまた積極的にその時代思潮に参画し、活発な批評活動を展開していた。しかしながら日本文学研究は従来、詩という領域を取り落としがちであり、現在もなお詩を内向的かつ閉鎖的な表現領域と見なす考えが根強い。

こうした通念を脱するために重要なのは、鮎川信夫(あゆかわ・のぶお、1920-1986)の詩と詩論である。鮎川は、戦後詩の原点とも呼ばれる詩誌『荒地』の中心人物であり、イギリスの詩人T・S・エリオットの影響のもとで詩を社会的な批評精神と結びつけたうえ、国家や社会のあり方に関する先端的な発議を行っていた。戦後を代表する作家・批評家である堀田善衛(ほった・よしえ)、吉本隆明(よしもと・たかあき)、加藤周一(かとう・しゅういち)といった面々も、出発当初には「荒地」や鮎川と深く関わっており、同時代的な課題を共有していた。鮎川を起点とすることによって、詩的言語を含めた同時代の主要な文学的課題と、それをめぐる議論の詳細な展開を把握することができる。また「荒地」グループは、戦後に隆盛した社会派の詩運動に対する芸術派の位相で捉えられてきたが、その中心にいた鮎川は、詩や詩人の社会的機能を理論・実作双方で追及し続けていたのであり、その著作は、詩的言語と社会との積極的な関係性を見失って行ったその後の現代文学を批判的に捉え直すための有効な視座にもなるのである。

だが戦後詩研究においては、詩的状況を詳細に把握するための資料整備が大幅に立ち遅れてきたため、周囲の文学状況との密接な関係性は看過されてきた。先行研究の多くは、詩人たちの戦争体験とその悲哀を重視するぶん、幅広い同時代状況や思想的課題を後景化してしまうか、あるいは観念的なアプローチゆえに、実際の詩作品や歴史性から乖離した議論に陥ってしまっている。

そこで申請者は、直接の手がかりとなる第一次資料の蒐集・拡充に努めながら、「荒地」の理念を支えた鮎川の詩と詩論の総体を、具体的な同時代状況との関連性のなかで解明する作業が必要であると考えた。

2. 研究の目的

(1)戦後の文学状況における詩人たちの活発な批評・言論活動の実態を、鮎川信夫および「荒地」グループを起点として資料面から考証することで、戦後における詩的言語の可能性を明らかにするとともに、戦後文学ないし戦後思想の全体像を再検討すること。

(2)戦後詩を理論面から牽引した鮎川信夫の著作とその表現の特質を、具体的な同時代状況との関連性のなかで理解することで、「荒地」グループの文学史的評価を刷新するとともに、詩による社会批評の可能性を見失って行ったその後の現代詩・現代文学の展開を批判的に捉え直すこと。

(3)(1)・(2)の成果をふまえ、国家や社会といった近代日本の共同体と詩的言語の関係性を、原理的かつ通史的に捉える視野を開くこと。

3. 研究の方法

(1)1950年代を中心とした戦後詩資料を整理・検討することで、当時の「荒地」グループの位置や後続の詩人たちの課題、また彼らの批評的交流の様相を解明する。具体的には、鮎川と親交があり、共同で詩誌を刊行したことのある広島市の詩人・宮田千秋氏の旧所蔵資料(詩誌・書簡・現代詩に関する展覧会の展示品)を整理・検証する。関係者各位への聞き取り調査を行うほか、当該資料の修復・保全・公開を目指す。

(2)鮎川の詩と詩論における独自の公共論、共同体論とその形成過程について考察する。具体的には、代表詩篇「橋上の人」に着目し、T・S・エリオットの演劇論からの影響関係や1920年代以降の日本の都市計画を支える思想的基盤への批評性を解明する。またその際、鮎川が絶えず論争的な姿勢を示していた1950年代の詩壇という共同体のあり方を資料に即して検証する。

(3)海外における日本戦後詩の新たな受容に向けて、詩的言語における翻訳の諸問題について国際的に議論する。本研究のように、詩作品が発表された際の周囲の状況を重視し、詩語が背負う歴史性を逐語的に検証する立場からは、翻訳によって検証不可能になる文脈があることは重大な関心事である。海外の研究者と積極的に連携することで、資料的検証と、新たな読解の可能性を同時並行的に探求する。

4. 研究成果

(1)広島市の詩人・宮田千秋氏から寄託されていた1950年代の詩誌について、精確な資料目録を作成した結果、約750冊以上に及び、全国の群小詩誌を中心に多くの稀覯本が見出された。50年代における「荒地」批評の内実を検証するために極めて有益な資料であ

り、すべて公益財団法人・日本近代文学館に寄贈したことから、それらを広く閲覧に供することが可能となった。また、当該の目録と、旧所蔵者の宮田氏の詩人としての活動の詳細については、広島県呉市における聞き取り調査などをふまえ、学会誌において紹介した。これにより、これまでほとんど知られてこなかった広島詩壇における戦後詩の重要な展開の一端を示した。

また調査の過程では、戦後の呉市という磁場が、広島市以上に軍都としての土地の歴史への反発から文化事業に注力していること、地域の文化的活動の母体となった呉市文化連盟とその主力団体としての呉新劇協会が、『囀地』関係者と密接に関わっていることなど、より詳細に汲み取るべき地縁・人脈について多くの手がかりを得た。詩の同人誌の最盛期と言われる1950年代には、こうした人的繋がりによって多くの詩誌が創刊され、それが交換されながら相互批評の俎上に載っていたことを思えば、今後、この調査を起点として他地域のグループ同士の詩的交流の実態を跡づけてゆけるはずであり、これまで重視されてこなかった地域ごとの動向に関しても数多くの発見が期待される。

(2) 鮎川信夫と広島市の詩人たちが共同で創刊した詩誌『囀地』をめぐって、鮎川の書簡など多くの新資料を発見し、その重要性を明らかにした。これまで『囀地』は一介の地方誌としてほとんど詩史の上で顧慮されてこなかったが、検証すべき多くの問題を包含している。まずは広島詩壇の問題として、峠三吉らが牽引する左翼文化運動に馴染めず、戦前のモダニズムを引きずる地元の高世代の活動にも違和感を覚えた若手詩人たちの結集の磁場となったことであり、実際にこの『囀地』に深く関わった若手たちが戦後の中国地方の主要な詩人として活躍することになる。この詩誌の創刊の経緯を明らかにすることで、広く「荒地」の後続の世代の問題意識を浮かび上がらせることができた。また鮎川や「荒地」の側の問題として、1950年代は「荒地」グループが主導的な役割を果たしたと言われてきたものの、実際には鮎川がほぼ孤立した状態で論争の渦中にあり、「荒地」のグループの意義が見失われた時期でもあった。『囀地』には、鮎川が同人誌を通じて具現化しようとした詩的共同性の理念が詰め込まれており、それは地方の詩人たちに対する後進育といった意味合いを越えて、「荒地」を継承する重要なグループを鮎川が組織しようとしていたことを示している。本研究期間においては、上記の新資料を織り交ぜつつ、これまで代代的な仲間意識に基づいて『荒地』グループに特別に向けられたと思

われてきた鮎川のグループ構築の技術や理念を明らかにし、論文として発表した。これによって、広島を中心とした戦後の文化運動研究の見地からも、また「荒地」を中心とした戦後詩研究の見地からも、1950年代の詩的動向を再考するための議論の土台を作ることが出来た。

(3) 1950年代前半に開催された「反戦平和のための詩歌原稿展」の展示資料の検証の結果、その来歴と実態をほぼ明らかにすることが出来た。姫路を拠点とする詩人集団・IOM(イオム)同盟が主催し、全国の著名な詩人から集められた葉書や原稿類からなるこの展示資料は、50年代の文化運動の全国的な広がりを具体的な人脈において確認できる貴重な第一次資料である。姫路においては、戦後しばらく当地に居住していた作家の阿部知二(あべ・ともじ)を中心に「城ペンクラブ」などの文化団体が発足し充実した文化活動を展開していた。IOM同盟もまた、その厚い文化的層に後押しされながら、上述の展示会を精力的に行っていた。その活動については一部の関係者の回顧録などで伝えられていたが、示資料がまとめて検証されたことはなく、本研究によってその実態が明らかになった。また上記「詩歌原稿展」資料と同じく宮田千秋氏宅に保管されていた「姫路原爆展」の展示案内の一部に関しても、これを確認したことによって、原爆の図の全国展開の一端を裏付けることができた。

本研究期間中には、研究協力を仰いだ川口隆行氏(広島大学准教授) 逆井聡人氏(東京外国語大学特任講師)との共同作業を重ねたうえ、申請者による調査報告書を形にするところまで到達した。作業としては資料のデジタル化と、上記の3名による原稿の印刷・冊子化を残すのみであり、近々に成果発表が可能である。なお、上記の資料は戦後の姫路の文化運動の実態を示すものであり、郷土資料としての性格も強いことから、姫路市立姫路文学館とも情報を共有し、資料面での研究協力を得た。今後、同館にも資する形での資料活用を模索したい。

(4) 「荒地」や鮎川信夫の詩をめぐる翻訳や海外受容の問題について、国際的な研究ネットワークの構築を進めることが出来た。まず、「荒地」の詩のフランス語訳を手掛けるカリーヌ・アルネオド氏と研究交流を行い、国際学会でのパネル発表の企画を立ち上げた。また、ジャック・ウィルソン氏(カリフォルニア大学ロサンゼルス校) フラボスキー・ドーラ氏(カーロリ・ガシュパール・カルペン派大学)ら海外の「荒地」研究者と共同で国際研究集会(「21世紀に『荒地』を読む」 日本戦後詩における歴史的課題

)を企画・実施した。その際、コメンテーターとして、鮎川信夫の担当編集者でもあった樋口良澄氏(関東学院大学特任教授)を招聘し、議論を牽引して頂いた。申請者は、鮎川信夫の詩「橋上の人」に関して、T・S・エリオットに由来する詩劇との関連性や、都市論としての性格について発表を行った。異なる歴史的文脈を背負う各国の研究者の視点から日本戦後詩を議論したことは意義深く、この成果は、現在論文として発表準備中である。

(5)(1)~(4)の研究と並行して常に進めている、戦後詩に関する第一次資料の探索・渉獵の結果、「荒地」グループの原型となった詩誌『LUNA』の散逸した初期ナンバーを確認することが出来た。戦前に、神戸を拠点として中桐雅夫が創刊した詩誌『LUNA』は、近年、復刻版が刊行されたものの、前半期のものがほとんど欠落したままであった。これらの目次細目及び解題は、論考として学会誌に発表した。なお、詩誌『LUNA』の重要な同時代誌となったのが、金森京助・島尾敏雄らの詩誌『峠』(第3次)であり、合わせて検証することによって、この二誌が互いに協力関係にあったこと、ひいては二誌を繋ぐ同世代の若手意識の実態を確認することが出来た。戦前の詩の書き手としては最年少の世代であった彼らの同時代意識についての探求は、戦後の「荒地」グループの意義を問う上でも不可欠な要素であり、この調査においては、とりわけ多くの詩誌に参加していた島尾敏雄に注目することの発展的可能性についても示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

田口麻奈、「初期『LUNA』と中桐雅夫」、『日本近代文学』(日本近代文学会) 査読有、第97集、pp113-121、2017

田口麻奈、「荒地以後を問い直す 大岡信と鮎川信夫」、『ユリイカ』、青土社、査読無、第49巻10号、pp129-137、2017

田口麻奈、「『荒地』と『困繞地』 広島詩壇における荒地以後の形成」、『国語と国文学』(東京大学国語国文学会) 査読無、第94巻5号、pp122-136、2017

田口麻奈、「『荒地』グループに関連する戦後詩資料の整理と検証 宮田千秋旧所蔵資料目録と解題」、『国文学論考』(都留文科大学国語国文学会) 査読無、第53号、pp45-74、

2017

〔学会発表〕(計2件)

田口麻奈、没後30年鮎川信夫シンポジウム基調講演「鮎川信夫・詩のことばに内在する記憶」、岐阜県郡上市・白鳥ふれあい創造館(郡上市図書館) 招待講演、2016

田口麻奈、「鮎川信夫「橋上の人」と近代主義の帰趨」、国際研究集会「21世紀に『荒地』を読む 日本戦後詩における歴史的課題」、2017

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
都留文科大学教員業績照会
<https://ptweb.tsuru.ac.jp/step/KInfo.asp?ID=186>

6. 研究組織

(1)研究代表者

田口麻奈(TAGUCHI, Mana)
都留文科大学・文学部・講師
研究者番号：80748707

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：